

中国北朝の都（その2）—北周と隋唐の長安—

於：大阪韓国文化院 4階セミナー室「冬」

2020年2月21日（金）

大阪歴史博物館 村元健一

はじめに

日本で最も有名な中国の都城は隋唐長安城だろう。整った平面、壮大な規模、日本都城への影響など、語られる点も多い。しかし隋唐長安城の巨大な規模、高い計画性は、歴代都城の中でも特異である。本報告では隋唐王朝の母体となった北周の長安を取り上げながら、隋唐長安が成立する過程を見ていくことにしたい。

1. 隋唐王朝の成立

- ・隋唐は南北朝を統一した王朝。日本も大きな影響を受ける（遣隋使、遣唐使）。
- ・北朝系の王朝。すなわち鮮卑族の影響が強い。
- ・隋唐が出てきたのは北魏—西魏—北周の流れ。
- ・経済的・文化的に、西魏—北周—隋唐が都を置いた長安（関中）は、洛陽・鄴（北朝の東魏—北斉）や建康（南朝）に劣る。
- ・唐の都城長安（隋の大興城）は日本都城に大きな影響を与える。

2. 都城の系譜—曹魏・西晋の洛陽を基点として—

- ・東晋南朝の建康：基本的には洛陽の再現を目指す。山川が多いため、平面は不定形。
- ・北魏の洛陽：曹魏・西晋の復興。新規要素：中軸線の設定。外郭の造営。
- ・東魏・北斉の鄴：北魏洛陽の再現（殿舎などは移築）。
- ・これまでの研究では、北魏洛陽—東魏・北斉鄴—隋唐長安という系譜が指摘されてきた。この流れは、近年の調査の進展を受けてもなお有効。
- ・しかし、隋唐王朝の系譜は北魏—西魏・北周—隋唐。王朝の系譜と都城の系譜の「ねじれ」はどう考えればいいのか？

3. 北周長安とは？

①遺構について

前漢の都だった長安城を利用。しかし、文献記録も少なく、発掘調査をしてもこの時期の遺構がほとんど出ないため、実態が分からなかった。

②想定される特異な姿

西魏・北周は『周礼』にのっとった制度を整備した王朝として有名。そのため、『周礼』

考工記の「王城」との関係が注目された。仮に西魏・北周の長安が、『周礼』王城の姿であれば、都城史上、特異で画期的な姿となる。北周長安宮城の正殿は「露寝」、その前の門は「路門」といい、他に「応門」が見えるが、これは儒教經典の「路寝」「路門」「応門」に相当する。前2者は南北朝の他の宮城ではそれぞれ「太極殿」「端門」に相当するもので、名称は特徴的なのは確か。

※『周礼』考工記・匠人營国条

匠人營國、方九里旁三門、國中九經九緯、經涂九軌、左祖右社、面朝後市、市朝一夫。

【現代語訳】

匠人が国（王城）を建設するには、九里四方とし、一辺ごとに三基の門を設ける。城内には縦横それぞれ九本の道を通し、幅は九軌（車線）とする。（王宮からみて）左側に祖廟、右側に社稷を設ける。（王宮の）前面は朝、背面は市とする。市と朝はそれぞれ百歩四方とする。

⇒北周長安への考古学からのアプローチは少なく、文献研究が主で、前漢長安の都城だけでなく宮城も再利用していると考えられてきた。したがって、北周の宮城は長安南部にあるという理解が有力だったのである。想定される北周都城の「画期性」は具体的に論じることはできなかったのである。

③「楼閣台遺跡」調査の衝撃

- ・長安城北東隅に「楼閣台」という基壇状の遺構があることは古くから知られていた。この基壇を調査したところ、北朝期の遺構である可能性が高く、また周囲には城壁があり、この基壇はその南城壁上に築かれていることが明らかとなった。
- ・基壇の南には闕状の基壇もある。平面を見ると門址に見えるが、高い基壇を有しており、明らかに宮殿の基壇である。
- ・これが北朝長安の主要宮殿で、周囲の城壁が北朝長安の宮城という説が出された（劉振東氏）。日本でもこの学説の影響を受け、北周長安研究が活性化（内田昌功氏がリード）。さらに踏み込んで唐長安大明宮の含元殿との関係も論じられている。総じて北朝長安の画期性が論じられるようになった。

4. 発表者の北朝長安の研究

- ・楼閣台遺跡を北朝以降の遺構と見ることに異論はない。しかし他に宮城に伴う遺構は検出されておらず、現在発表されている資料だけを基に北朝宮城を論じるのは早計と考える。
- ・「宮城」とされる一郭は、同時代の他の宮城に比べると規模が大きく、平面も異形。改めて西魏・北周期の文献を整理したところ、短期間で宮城の改変が大きい。正殿である露寝まで破壊命令が出されている。

北周の孝閔帝元年（557）正月即位の際に、「路門」初出。

北周の武成2年(560)、武帝即位の年。「露門」「応門」を改作。

北周の武帝の保定3年(564)、「露寝」を改作。

北周の武帝の天和元年(566)、「露寝」完成。

北周の武帝の天和6年(571)、「露門」まだできず。

北周の武帝の建徳6年(577)5月、「露寝」破壊。

北周の宣帝の大象元年(579)、「路寝」で朝見。

隋の開皇2年(581)、隋の文帝、「臨光殿」で即位。

- ・南北朝期の太極殿は隋唐の太極殿や日本の大極殿のように単体で存在せず、左右に東西堂を従えるのが特徴。北周にも「東堂」が存在したことが確実。
- ・発掘調査によると西側の城門は前漢末に焼け落ちた状態のまま。東側の城壁のみ修復しているが、門道を3から2に変更するなど簡素化。
- ・隋文帝の詔(史料参照)
- ・このことから、北周長安はきちんとした宮城プランを取るにはいたらず、後世に多大な影響を与えたという評価は困難と結論した。北朝長安の宮城の場所も、楼閣台周辺だけでなく、長安南東部の旧長樂宮周辺も注目すべきことを指摘。

5. 隋唐長安城の系譜

- ・北周長安に都城史上の画期性を見出せなければ、隋唐長安の系譜は通説どおり北齊の鄴や南朝の建康に求められることになる。しかし、北周末期に鄴城は徹底的に破壊されており、直接の継承は困難では？
 - ・北周は隋唐の母体だが、都城に関しては継承された要素が少ないのでは？
 - ・都城系譜論で見落としている要素はないか？
 - 北齊・南朝文化人、官僚の登用。→北齊・南朝の都城文化(ソフト面)の流入。
 - 北周宣帝による洛陽宮の再興→北魏洛陽の遺構を踏襲。具体的な設計、工事を通じて、北魏-北齊の都城文化を北周が再建。
- ⇒北周長安と隋唐長安の間にこうした要素が入り、北齊の鄴や南朝の建康といった南北朝都城の要素が隋唐の都城に継承されたと考えられる。

6. 北周長安と隋唐長安の関係

①新旧都城の関係

- ・隋文帝の北周長安への評価
 - 「今の宮室、事は權宜に近し」=今の宮室(北周の宮城)は仮のものにすぎない(文帝の詔)
- ・その他
 - 水が塩辛い
 - 幽霊が出る

⇒ネガティブな評価ばかり（実際以上に）

新たな都城（大興城）を造営する理由となる。

大興城ができると北周長安は禁苑に取り込まれる。北周長安は都市機能を完全に失うが、名目的に新都と一体化。

旧都城を否定するが、新都城の一部に取り込むことで歴史性を継承することをアピール。

②皇帝陵との位置関係

（前提）漢人は立派な墓をつくる。鮮卑は本来は簡素な墓で、遺体を埋葬すると地表から痕跡を消す。北魏の皇帝陵は途中までは都城から離れ、規模もそんなに大きなものでなかったと考えられる。

- ・都城からの景観。北魏、東魏・北斉では都城から皇帝陵が望見できた。西魏・北周では全く見えない。
- ・西魏の皇帝陵の外形は北魏・北斉のものに近いが、築かれた場所が都から離れすぎている。
- ・北周の皇帝陵は都城に近いが、墳丘を築かない。
- ・隋の皇帝陵および唐の初代皇帝陵は、いずれも大きな墳丘を有するが、都城からかなり離れており、視認できない。

おわりに

北周と隋唐の長安は、連続した王朝の都城でありながら大きな違いがある。隋は分裂時代を統一し、新たな時代を切り開く諸制度を打ち立てていた。それを良く示すのが都城の姿である。南北朝期末に中国は北西の北周、北東の北斉、南の梁・陳の3つの王朝が並立し、その中で北周の国力が最も弱かった。結果として最弱だった北周の出自である隋が、強者をほろぼし、統一を成し遂げるわけだが、その都城はまったくの新規造営で、しかも既存の都城の規模・構想を超克するものであった。鄴と建康は物理的に抹殺され、北周長安は禁苑の一部となった。

新たな長安の誕生はこれまでの都城の集大成であるとともに、新たな時代の都城となるべく構想されたものだったのである。

参考文献

- 内田昌功 2009「北周長安宮の空間構成」『秋大史学』55
2010「北周長安宮の路門と唐大明宮含元殿」『歴史』115
2017「魏晋南北朝の長安」窪添慶文編『アジア遊学 213 魏晋南北朝史のいま』勉誠出版
- 王 仲榮 1980『北周地理志』中華書局
- 王 仲殊 1957「漢長安城考古工作的初歩収獲」『考古通訊』1957年5期
1958「漢長安城考古工作収獲続記—宣平城門的発掘」『考古通訊』1958年4期
2010「漢長安城城門遺址の発掘と研究」『考古学集刊』17
- 窪添慶文 2011「魏晋南北朝の長安」東洋文庫中国古代地域史研究班編『水経注疏訳注（渭水編下）』所収
- 佐川英治 2016『中国古代都城の設計と思想—円丘祭祀の歴史的展開』勉誠出版